埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

赤松克麿における政治志向の芽生え

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2016-09-12 キーワード (Ja): キーワード (En): Akamatsu Katsumaro, relief for the weak, debating club 作成者: 福島, 良一 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/402

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

赤松克麿における政治志向の芽生え

福島良一

はじめに

本稿で取り上げる赤松克麿は社会運動家のなかで労働者解放と国際連帯の主張から日本主義的国民主義へと政治的立場を変えた人物であるが、以下では、特にその生い立ちと第三高等学校時代を中心に、父母からの影響や弁論部活動を通して政治志向を強めていく様子を明らかにする。

一　父母の影響

赤松克麿は、一八九四（明治二七）年一二月四日、浄土真宗僧侶の赤松照幢と安子の四男として風光明媚な瀬戸内海を臨む山口県徳山に生まれた。時あたかも朝鮮の支配権をめぐって日本と清国が干戈を交えている真っ只中であった。振り返ればまさに日本が植民地帝国としての第一歩を踏み出さんとする時代でもあった。父照幢は歌人与謝野鉄幹（寛）の兄であったが、一八八六（明治一九）年に婿養子として赤松家に入り、徳山にある徳応寺の住職の地位を受け継いだ。母安子の父は、徳応寺を照幢に譲った後、京都に出て浄土真宗本願寺派の本山である西本願寺の高僧となった赤松連城（大学林綜理、執行長などの要職を歴任）である。赤松にはほかに六人の兄弟がいたが、いずれも哲学者、医学者、洋画家、社会運動家の道に進むなど高い学識を備えた教養人であった。[*1]

赤松の家庭には、寺を営む家ならではの「宗教的厳格さ」の漂う雰囲気があった。だが、そんななかにあって少年期の赤松は「腕白の仕放題をやり通す」奔放な生活を送っていた。そして、彼は名家の出であるという「門地的境遇」へのプライドと「秀才としての自意識」を併せもった「頗る意気の驕った少年」であった。[*2] そのような優越感に根差した「驕慢」さをもつ赤松ではあったが、その彼を感化したものは父照幢と母安子の生きざまだった。宗教家にして社会事業家でもあった両親は、社会で虐げられた人々を慈しみ、困窮した弱者の救済活動に献身していたのである。特に反骨の慈善家として生涯を全うした照幢は、赤松の人生に大きな影響を与えた存在であった。

義父連城から徳応寺を引き継いだ照幢は、連城が「元老株」と

して君臨する西本願寺の特権的な「羅馬法王的貴族制度」に反発し、本願寺（＝浄土真宗）そのものへの失望感を募らせていた。そして、それが原因して彼は連城と疎遠な関係になっていった。照幢は僧侶という立場にありつつも、人間の良心とキリスト教的な愛を謳ったトルストイに私淑し、妻安子とともにその「宗教的情熱」を民衆の啓蒙教育や生活改善、そして部落改善運動などの社会事業活動に傾けてきたのである。そこで貫かれた生活態度は「社会改良」を志向する「宗教的人道主義」に裏打ちされたものであった。夫妻は白蓮女学校（後の徳山女学校）や幼稚園などを設立・経営する傍ら、赤松家に寄寓する免囚、囚人の子供、不良少年などの世話をしている。また一九一三（大正二）年二月二日に安子が他界するや、照幢は救済活動に一層没頭し、晩年には周囲からの「俗人的非難」にひるむことなく自ら部落に移り住み、一九二一（大正一〇）年八月二四日に急死するまでそこに住む人々と生活をともにしたのであった。[*3]

こうした父母の反骨精神と虐げられた人々に注がれる慈愛の心を幼少の頃より日常のなかで身近に感得できたことは、赤松にとって権威や権力に対する反抗心を醸成させ、また社会的な弱者への共感の心を育むうえでの原動力となったのである。そして、それはまた後に彼が無産階級運動への道を志すにあたっての道標ともなっていった。[*4] 赤松は回想する。

「斯くの如き生活環境は、一面に於て極めて快活な順境なわたくしの心理に、一脈の暗いショックを与へないでは置かなかつた。特権階級を白眼視する態度、虐げられた民衆の善き友となること、父母の人生観はいつとはなく私達に遺伝してしまつた。私は七人兄弟の四番目であるが、父母の人生観や社会観を、最も強く受けついだのは私であつた。……私が社会運動者となつたことは、一個の必然とも云ひ得る。[*5]」

父照幢も、やがて社会運動に足を踏み入れていくことになる赤松の「良き理解者であり同情者であ」りつづけた。[*6] 後年、照幢が亡くなる年の一月に徳山に帰省した折、当時大日本労働総同盟友愛会に属していた彼は父からこう言い残されたという。「俺が亡くなつても決して葬式をしてはならぬ。また墓標なども立つるに及ばぬ、唯願ふ所は、お前等の力で不合理な現在の社会を改造して万人共存の新社会を建設する様に努力してくれ」ることだ、[*7] と。赤松の社会運動入りを「痛心した」[*8] 祖父連城とは実に対照的であった。

ところで、父母の「人生観」に触発されながら反骨精神を培った赤松は、中学時代に退学騒動を引き起こしている。この騒動は一九一一（明治四四）年一一月、彼が徳山中学四年生の時、自治権を渡せと要求する生徒と学校当局との間で衝突が起こり、同盟休校の先頭に立った赤松が退校を命じられたというものである。[*9] リーダーとしての彼の振る舞いは、権威や権力に抵抗する気概の強さを示すものであったといえよう。退学後、元来秀才肌であった赤松は半年ほどの独学をもって中等学校検定試験に合格し、その後京都の第三高等学校第一部甲類（英法科）を受験、一九一二（大正元）年九月皮肉にも「同窓生より一年早く、云わば二段跳びで上級学校に進学」することになった。赤松の三高合格は、彼を退学せしめた徳山中学校に対する町の評判を悪化させた。こうしたなかで、徳山の地元新聞に「硬骨野人の匿名で学校攻撃の辛

辣な投書が載せられ」る。この投書の主は赤松であったが、徳山中学で彼と「形影相伴う仲」だった荘原達（一九二二年に創立された日本農民組合に参加）たちが、その投書欄を切り取って学校の講堂に貼りつけ学校当局の責任を追及した。彼らの「智能犯的遣り口」により、結果、校長および悪評ある教師が学校を追われることになったという。[10] 赤松らの策士的素質を窺わせるエピソードであろう。

二　三高進学と政治志向

三高入学のため、赤松は故郷の徳山を離れ京都に赴いた。京都には祖父連城と祖母千代野が居住していたものの、訪れることはめったになかった。そもそも彼はそれまで祖父母と生活をともにしたことはなく、会うことも稀であった。特に連城が「家族的親しみを与へる性格ではなかつた」[11]こともあり、祖父母の家に身を寄せるほどの親近感が湧かなかったようである。また同時に、敬愛する父照幢が連城と疎遠な関係にあったことも大きく影響したであろう。親元を離れた赤松にとって、新たな生活を送る京都は誰に気兼ねする必要のない空間であった。しかも「自由」な校風を伝統とする三高は、「腕白」な彼が学校生活を謳歌するに申し分のない環境にあった。

反骨精神に満ちた赤松は入学後、弁論部に入部する。当時の学生弁論部は、その多くが学生の政治的意見の発表の場となっており、なかでも三高弁論部の活動はひときわ活発であったといわれる。[12] そうした政治に敏感な弁論部の部員となった彼が活動を始めてほどなく、弁論部の政治熱を沸騰させる政治状況が現出する。すなわち、一九一二（大正元）年の末から翌年の初頭にかけて展開された第一次憲政擁護運動の発生である。時代はまさに民衆が政治の表舞台に登場せんとする時節を迎えていたのである。

運動の発端は、周知のように陸軍二個師団増設問題であった。当時、財政難に直面していた第二次西園寺公望内閣は行財政整理の必要から閣議で増師反対の方針をとり、ために増師を主張する上原勇作陸相が一二月二日に天皇へ帷握上奏を行って辞表を提出、陸軍は後任陸相を推薦せず五日西園寺は総辞職を強いられることになる。衆議院第一党の政友会を与党とする西園寺内閣が、いわゆる「陸軍のストライキ」によって倒されたことは、「陸軍横暴」の世論を喚起する結果となった。さらに、一四日の元老会議において後継首相に内大臣桂太郎が内定されたのを受け、「宮中府中の別を乱す」との非難が巻き起こる（同日、政友会の尾崎行雄や国民党の犬養毅が中心となり憲政擁護会が組織）。世上に不穏な空気が流れるなか、一七日勅語をもって桂の首相就任が決定され、次いで二一日には留任を渋る斎藤実海相にも勅語が出されて第三次桂内閣が成立するに至った。このような天皇を政争に巻き込んだ形で発足した桂内閣に対して、政党や言論界、民衆などの間からは激しい非難の声が上がり、「憲政擁護・閥族打破」のスローガンを旗印とした藩閥政府排撃運動が華々しく展開されていくことになった。桂は衆議院での基盤を構築すべく一九一三（大正二）年一月二〇日に新党構想を発表、翌日国民党所属の半数を超える議員の誘い込みに成功したが、政友会の切り崩しには失敗、また三度の議会停会や政友会鎮撫の詔勅を通じて事態打開を試みたものの、議会に押し寄せ一部暴徒化する群衆の圧力を前に、二月

一一日退陣を余儀なくされたのである。いわゆる大正政変である。

民衆の行動に下支えされた反政府運動が桂内閣打倒に向けて突き進むといった政治情勢は、赤松が属する弁論部の部員たちを奮い立たせずにはおかなかった。彼は当時の様子について「さうした時代の空気は敏感な学生にも反映して学生の雄弁熱を刺戟」することになった[13]と振り返り、「我々青年は凡て自由主義の味方[14]」として憲政擁護運動に共鳴していったと述べている。また『第三高等学校弁論部部史』（以下『部史』と略す）も記す。政変前後の「かゝる政治季節の最中に催されたる演説会が国家、政治、輿論にその言論の対象を得たるは蓋し当然のことであつた。我々は、一月二日の悠緊会大会（当時の弁論部二年生が運営―福島）、二月十六日の演説部大会（三高の五名をはじめ京都帝国大学、同志社大学、佛教大学、大阪高等商業学校、八高を含む計一二名の弁士が登壇―福島）にその実際を見るのであつて、時恰かも言論高調のとき、何れも非常なる盛況を以て開かれてゐる」[15]と。だが政変後、政友会と山本権兵衛（薩摩閥）との妥協により二月一三日に第一次山本内閣が成立、政党と藩閥の提携というスタイルが復活する。これに憤慨した弁論部縦横会（当時の三年生が組織。麻生久、棚橋小虎、山名義鶴、岸井寿郎など後に労働運動の指導者となる逸材が属していた）の有志らは、憲政擁護運動の継続を訴えるべく、運動の指導者である犬養（国民党）、尾崎（政友会脱党後、政友倶楽部を経て中正会を組織）、岡崎邦輔（政友会）の三名に護憲のための提携を求める勧告状を郵送し、弁論部内外に呼びかけて木堂会や咢堂会を組織した。こうしたなか、山本内閣成立後も「憲政擁護運動のため、東奔西走してゐた[16]」尾崎が咢堂会の求めに応じ、四月一二日に京都の知恩院にて講演を行うことになる。この講演会は「甘藷と萩の餅を喰つて薩長閥族の打倒を諷して、意気軒昂なるものがあつた[17]」という。ゆえに、そこでは藩閥官僚政治批判とデモクラシー擁護をめぐる議論が展開されたことは想像するに難くない。赤松もこの講演会に参加し刺激を受けている。回顧していわく、

「尾崎行雄氏が一党を率ゐて京都で獅子吼したとき、麻生、山名、岸井の諸君と我々は一夕尾崎氏を囲んで夜更けるまで知恩院の一室で語り合つたことを覚えて居る。私が将来学校を出ても、官吏になることをやめ、民衆政治家になつて大いに民衆のために尽さうと決意したのはその頃であつた。[18]」

政治家となって民衆政治の実現に努めること、それは権力への抵抗と弱者救済の使命感に突き動かされた赤松自身の反骨精神を体現することと接続されていく。彼の政治への関心は深まるばかりであった。弁論部における一年先輩であり、兄義麿の同級生でもあった末川博（民法学者、第二次大戦後立命館大学総長）は赤松の政治志向の強さについて次のように回想している。

「高校時代には兄の方よりも弟の克麿の方がしたしかった。

「おーい、末川、まだ起きちょるか」と大声でどなって、夜おそく黒谷前の彼（「彼」とは末川自身を指す―福島）の下宿にやってきて、議論したあげく、二人でセンベイブトンにくるまってねたこともある。……「政治家になろうじゃないか。政治でなけりゃ、社会は動かんぞ」。赤松克麿は、ときどきこんなことをいって、彼に政治の方向に出ることをすすめた。……二人が顔を合わすと、話はとかく政治問題や社

会改良の問題に及んで、はげしい口調で書生論をたたかわすのが常であった。[19]」

さて、政治家志望を強めた赤松が弁論部の表舞台に立つことになるのは二年生に進級してからである。彼が折々の思索や記録を書き留めた「自筆ノート」（三高時代のものは三年生後半の一九一五年一月―六月分のみ）が現在断片的に残されているが、そのなかに三高二年の時期を「精励力行期（大正二年秋ヨリ三年夏マデ）」と特徴づけた文言がある。[20]二年生半ばの冬休みの頃に「歓楽的気分を一掃して厳粛なる意志的生活に入らんと決心した」とノートに書き込んでいる赤松は、その頃より勉学に意欲的に取り組む決意をしたようであるが、弁論部の活動でも次第に頭角を現してきていた。彼の演説は「ドモリ口調[21]」であったが、三高時代はその発声上のハンディキャップを補うかのように、また生来の「感受性の強い[22]」激情的な性格も手伝って、激しい調子で行われていたようである。二年後輩であった平貞蔵（社会思想家、後に昭和研究会参加）は「弁論部の闘将として活躍し」ていた赤松の演壇での様子を回顧し、「あの早口で熱情的な演説は今でも眼のあたりに浮かぶ[23]」と述べている。

赤松の弁論部での主な活動は、『部史』の記録によれば以下のとおりである。

一九一三（大正二）年一〇月一八日の新旧部長送迎大会で「閥族論」と題した藩閥政治批判を窺わせる演説。[24]

一一月に弁論部が「護憲運動に刺戟せられた青年学生の旺なる政治熱[25]」の発露の場として開いた「擬国会」にて、「陸軍五箇師団増設案」や「海外移民法案」の議題のもと「外務大臣」役を担当。

一九一四（大正三）年四月五日の三高一高連合演説会において「頑迷なる凡ての旧道徳の偶像を破壊[26]」する必要を説いた「人間教」と題する演説。

三年生となった九月一一日の校風自由演説会で「校風の宣言」と「閉会の辞」を担当。

一九一五（大正四）年一月三〇日に行われた「衆議院議員選挙法改正案」「一年兵役案」「海軍拡張案」を議案とする「擬国会」にて「立憲帝国党内閣」の「外務大臣」を担当。

二月二〇日の関西連合演説会で「感激の生活」と題した演説。

そして、『部史』に記載はないが、赤松の「自筆ノート」（日付不詳）には五月二二日送別演説会開催（出演者一八名、会食者一五名）の記述があり、これが彼にとって三高最後の演説会であったと思われる（演題は不明）。ともあれ、「擬国会」ではもっぱら「外務大臣」という権力側の役を務めてはいたものの、彼は民衆政治家への夢を抱きつつ精力的に弁論活動に励んだのである。

三　信念の追求

ところで、三高弁論部は部員による弁論活動のほかに、部活動の一環として言論人や政治家などを招いての「名士招待講演会」を不定期ながらも開催していた。赤松が三年に在学していた一九一四（大正三）年九月二六日に大阪朝日新聞記者の長谷川如是閑、一一月七日には第二次・第三次の桂内閣で逓相兼鉄道院総裁などを務めた「官僚系の政治家」である後藤新平が来校し、それぞれ一場の演説を行っている。こうした講演会は部員たちにとって、見識を高め、演説技術を磨くための一つの学びの場となっ

た。赤松も話を聞いていたようで、特に後藤の演説について後年次のような感想を述べている。

「その時僕は実にウマイものだと思つた。大した雄弁でもなければ、また其の内容が充実して居るといふ訳でもない。併し豪放なそして軽妙な調子で以て、聴衆をスツカリ呑んでしまつて、聴衆は自在に翻弄せられたのであつた。僕は其の後で友人と斯う語り合つたのを覚えて居る。「アンナ男に一人〳〵口説かれた日には全く敵はないね」僕は其の時、所謂一流の政治家といふ連中は、非凡な人間籠絡術を心得て居るものだとつく〴〵感じたのであつた。[27]」

後藤の弁舌は聴衆の心をつかむに秀でた点で刮目に値するものであった。彼の演説を通して、赤松は「人間籠絡術」としての演説技巧について認識を新たにすることになったのである。しかしながら他方で、「其の内容が充実して居るといふ訳でもない」後藤の演説に赤松は飽き足りなさを感じたのではなかろうか。演説内容は不明であるが、後藤は政治家として自らの政治信条や思想を語ることはなかったようである。実際、赤松は後に後藤の思想の不明瞭さを指摘している。東京市長となった後藤（一九二〇年一二月―二三年四月在職）を評していわく、「彼は随分駄法螺も吹くが、時には固陋な官僚畑の育ちとは思はれない斬新警抜な意見を吐くことがある。……彼は政界の人気男ではあるが、彼が如何なる政治思想を抱いて居るか、僕は知らない。……彼は或は偉大なるオポチユニストかも知れない[28]」、と。話術の巧みさとは裏腹に、自己の思想を明確に示さない後藤の演説は、民衆政治の理念を強く抱く赤松にとっては、違和感を感ぜざるを得なかったのではないか。自らの思想に裏づけられた政治信念を提示する点にこそ、彼は政治家の価値を見出していたと思われるからである。

赤松の残した自筆ノートには、三高生活の記録や自作の和歌、思索の跡などが書き記されているが、そのなかにも信念を貫く生き方への共感を窺わせる文章が見られる。卒業を控えた一九一五（大正四）年六月一〇日付のノートにはこうある。

「歴史を学んで痛切に感ずる事実は、偉勲ある傑士が多く不遇に終る事である。彼の功績に対して報酬が与へられない。時には仇を以て報いられる。而して彼の功績を遂行するその経路が決して快感を彼に与へずむしろ、苦痛を与へる事である。彼の功績や人格の真価は彼の死後認められ、後世の公平なる人間等が彼を讃美し崇敬する。彼の人生の行路が後世から美化され浄化される。彼は自己一人でまた自己を理解し同情する少数の友人と共に、自己の功績を明かに認識し、自己の人生の偉大なる事を承認して、その快感に満足せねばならぬ。彼が自己の行動を享楽せんとするならば彼は彼の生活を芸術せねばならぬ。」

ここで語られているのは、「偉勲ある傑士」の生きざまへの共鳴であり、それはまさに父母の反骨精神とも重なり合うものであったろう。また自己の行動に対する不寛容の甘受と死後の評価への期待、そのことは後の日中戦争下に行われた、いわゆる反軍演説（一九四〇年二月二日）への懲罰によって衆議院を除名された民政党代議士斎藤隆夫[29]の漢詩、「吾が言は即ち是れ万人の声　褒貶毀誉は世評に委す　請う百年青史の上を看ることを　正邪曲直自ずから分明」（読み下し文）を想起させる。ここに共通するのは、

強い信念に支えられた自己の行動への確信である。

こうして民衆政治実現の信念を胸に赤松は「わが生の花やかなる」三高生活に別れを告げることになる。一九一五（大正四）年九月東京帝国大学法科大学政治科へ進学、そこは政治を志す彼にとり新たな飛躍の舞台となっていく。

（注）

*1　長男智城は京都帝国大学でインド哲学を専攻し文学博士、京城帝国大学教授、次男信麿は京都帝国大学で癌研究に従事し医学博士、長崎医科大学教授となるもベルリン留学中にスペイン風邪にて客死、三男義麿は東京帝国大学で美学を専攻し洋画家、金沢高等工業学校教授、妹常子は日本労働総同盟婦人部主任、戦後日本社会党参議院議員、後に民社党参加、五男五百麿は京都帝国大学にて河上肇門下、労働農民党に参加、和歌山高等商業学校教授、六男廉麿は京都の中学を卒業後上京、哲学の勉学に励む（野口義明『無産運動総闘士伝』社会思想研究所、一九三一年、四―五頁および全織同盟教宣部編『道絶えず―赤松常子、その人とあしあと―』全織同盟教宣部、一九六四年、二―三頁を参照）。

*2　赤松克麿「トルストイの父」（『ワールド』一九二七年五月）一八六頁。

*3　同右、一八六―一八七頁。

*4　少・青年期における社会問題に対する赤松の関心については、ジョージ・O・トッテン「政治活動家およびイデオローグとしての赤松克麿」拙訳（『琉大法学』第四九号、一九九二年九月）二六―三四頁を参照。

*5　赤松、前掲「トルストイの父」一八七頁。

*6　赤松克麿「祖父連城を語る」（『現代仏教』一九三三年七月）六五八頁。

*7　「上富士前だより」（『ナロオド』一九二一年九月）一六頁。

*8　赤松、前掲「祖父連城を語る」六五八頁。

*9　野口、前掲書、五頁。ただ、当時赤松の同級生であった荘原達は、戦後赤松への追悼文のなかで赤松退学の経緯に触れているが、そこでは「前校長の死後、新校長が赴任したが、統率の才なく、校規は紊れ、下士官あがりの体操教師が、生徒のお目付役となり、情実が全校を支配した。これに憤激した赤松君は、教師排斥の急先鋒となつたが、とうとう学校当局の忌違（ママ）に触れ、自発的に退校することを余儀なくされた」（荘原達「わが終生の友赤松君」『日本及日本人』一九五六年二月、四八頁）と書かれており、体操教師排斥運動が赤松退学の理由とされている。しかし野口、上掲書の「荘原達」の項目に、赤松の退学の翌年、荘原が「五年の時、体操教師の収賄事件を暴露してその更迭を迫り、校長を講堂に引張り出して詰問立往生せしめた事から、卒業試験中に停学処分を受けた事もあつた」（一四五頁）との記述が見られることを踏まえると、荘原の記憶は自身の停学理由と赤松の退学理由を混同したものとも考えられるが、騒動の顛末について赤松自らが語ったものが見当たらず実相は不明。

*10　荘原、前掲、四八―四九頁。

*11　赤松、前掲「祖父連城を語る」六五五頁。

*12　H・スミス『新人会の研究―日本学生運動の源流―』松尾尊兊・森史子訳（東京大学出版会、一九七八年）四二―四三頁。

*13　赤松克麿「私の雄弁修業時代」（『雄弁』一九三九年一一月）一〇八頁。

*14　同右、一一〇頁。

*15　『第三高等学校弁論部部史』（第三高等学校弁論部、一九三五年）一一二頁。

*16　尾崎行雄『咢堂回顧録』下巻（雄鶏社、一九五二年）八八頁。

*17　前掲『第三高等学校弁論部部史』一一三頁。

*18　赤松、前掲「私の雄弁修業時代」一一〇頁。

*19　末川博『彼の歩んだ道』（岩波書店、一九六五年）一四九―一五〇頁。

*20　『赤松克麿関係資料1　日記類』早稲田大学戸山図書館所蔵マイクロフィルムMF44―1（「ノートNo.1」一九一五年一月〔日不詳〕の項）。

ちなみに、出生から中学時代は「華想歓楽期（明治二十七年ヨリ大正元年夏マデ）」、三高一年は「頽廃荒寥期（大正元年秋ヨリ大正二年夏マデ）」、三高三年は「努力的華想期（三年秋ヨリ）」と特徴づけられている。

なお、『赤松克麿関係資料』は赤松の自筆ノート二六冊および原稿八本その他からなり、「日記類」「ノート類」「原稿類」に分類されている。

*21 宮崎龍介「新人会と若き日の克麿君」（『日本及日本人』一九五六年三月）四八頁。

*22 前掲『赤松克麿関係資料1　日記類』（「ノートNo.1」一九一五年六月一〇日の項）。

*23 平貞蔵「赤松君の思想」（『日本及日本人』一九五六年三月）五二頁。

*24 玉井清「赤松克麿のデモクラシー観」（『慶應義塾大学大学院法学研究科論文集』第一九号、一九八三年）一九七頁を参照。

*25 前掲『第三高等学校弁論部部史』一一九頁。

*26 同右、一二〇頁。

*27 赤松克麿「芝居の打てる政治家」（『解放』一九二三年一月）二九二頁。

*28 同右、二九二―二九三頁。

*29 斎藤隆夫『回顧七十年』（中央公論社、一九八七年）一五〇―一五八頁参照。

Akamatsu Katsumaro's Awakening to his Political Orientation

FUKUSHIMA, Yoshikazu

キーワード：赤松克麿、弱者救済、弁論部
Key words ：Akamatsu Katsumaro, relief for the weak, debating club